

オカラと岩塩で命をつなく

長野県 正木 千代江

昭和十二年五月、満鉄にいました兄より手紙がきまして、満州見物に来るようにとのことでした。五月二十九日、主人が一人で出かけて行きました。大連にいる兄の案内で方々を見物していましたが、その内に、大倉土木に勤めたとの手紙でした。

二、三年して、氣候が合わないとかで目が悪くなり、勤めをやめ、家族と共にできる仕事をしたと言ってきました。満鉄にも知人がたくさんいましたので、独身寮の食事の請負をしてはということになり、私共も十五年の七月、渡満することになりました。

妹みちると養女マサ子を連れて出かけました。新潟より満州丸で翌朝、朝鮮の羅津に着きました。主人は吉林市の満鉄江南寮より迎えに来ることになっていました。

吉林行きの列車に乗り、見渡すかぎりの曠野を走りつづけました。原っぱには真つ赤な姫百合の花が一面に咲いておりました。

十時間以上、やっと吉林駅につきました。駅前の広場には何百台ものマーチョ(馬車)が並んでおり、むせかえるような熱気と匂いでした。マーチョに乗って江南寮に着きました。

この寮は、満鉄青年隊の寮で、十五、六歳ぐらいの子供ばかり、五十人ほど入っており、舎監と寮母と私共でした。夜になると、故郷を思い出して泣いている子もいました。そのうち、長男清郎が生まれ、妹みち子が、気仙沼市から来た人に嫁ぎました。マサ子は小学校へ通っていました。

そのうち、梅河口に満鉄独身寮が出来るのでそちらへ行く様になると言われ、三百人も入る大きな寮でした。しだいに戦争もはげしくなり、寮の人達も毎日のように召集されていきました。梅河口へ来て、次男清典が生まれる時、内地から妹久子がきました。弟が出征するので、久子に帰るようと言って、久子は一人で帰

るのはいやだから清郎をどうしても連れて行って内地の学校に入れたいといつて、連れて帰りました。十九年の十二月の寒い日でした。梅河口は、奉天と吉林の中間にあり、関東軍の指令はすべてここからというので、飛行場を造り、兵隊は全満より集まり、ものものしさでした。食糧、物資が山のように運びこまれました。終戦となり、兵隊は毎日のようにソ連へ連れていかれました。

九月十八日は満州が日本に負けた日で、残念日と言って日本人は皆殺しだ、と云う。

いよいよその日の前日、社宅の人達は着られるだけ着て、持てるだけ持って家をしめて大和塾へ集まってきました。男の人は外で警備にあたり、御飯をあるだけ炊いておにぎりにし、持っていくことにしました。十八日未明、暴動がおきてわあ／＼と云う声が聞こえてきます。そのうち、鉄の棒を持った満人、子供も女も一緒になって何千人とやってきました。

社宅をこわし、中の品物、食糧を次から次にと持って行きます。最後は、天井裏、床板まではがして持っ

て行きます。昼頃までには、屋根と柱しか残っていません。暖かい南満へ行かなければ生きられないというので、機関区より汽車に乗り、撫順に向かって出発しました。

途中、梅河口の駅より乗った日本人は持っている物はとられ、着ているものはぎ取られ、男はパンツ一つ、女は腰巻一つでした。三枚着ている者は二枚出し、二枚着ている者は一枚出しました。撫順についた時、冬までには社宅へ入れるようにすること満人の囚人小屋へ入りました。そこはノミやシラミがいっぱいで足など真っ赤になるほどついできます。その内、悪性のハシカが流行し、子供はほとんど死んで行きました。次男の清典もとうとうハシカにかかり、亡くなりました。寒くなつてから撫順の社宅へ行き、一冬を越すことになりました。一軒の家へ十五人ずつ入るようになりしました。食事は朝夕コウリヤンの雑炊をお茶碗一杯、子供は半分の配給でした。それだけではとてもお腹がすいておられないので満人の豆腐屋さんに行き、オカラをバケツ一杯ずつ毎日いただくことをお願

いしました。ほんとうに助かりました。オカラをそのまま、岩塩をつぶしてかけて食べました。三月に入ってから、家中の人達が栄養失調と発疹チフスになり、けんめいに看病してなおり、最後に私がたおれてしまいました。ハルピンの大丸院長先生が、毎日強心剤とブドウ糖を注射して下さいました。十日間もこんこんと眠りつづけて、目をさました時は、骨と皮ばかり。毎日、主人とマサ子に助けられて、歩く練習をしました。七月、引揚船に乗り、一か月かかって舞鶴の港へ着きました。それから一か月、舞鶴病院で静養し、なつかしい故郷に帰ることになりました。

図們から新京、そして帰国へ

新潟県 羽賀 富 一

昭和二十年八月十三日昼過ぎ、ソ連のマークをつけた偵察機一機、図們市の上空を低空旋回した。夕食時、図們駅に勤めている友人から電話があり、満鉄職員の内

家族は明朝日本に帰還すると云う挨拶があった。

満鉄と国際運とは一体の関係にあり、満鉄は鉄路、国際運輸は陸路、積荷、荷降ろし、通関手続きその他これに附随するいっさいの業務についての代弁を業務としている関係上、帰還についてはあらかじめ打合せ済みであった。支店長へ電話。満鉄と更に協議の上疎開について同一行動をとることとなり、わが社は社員の一部と家族総勢二百五十余人を総務課長の私と前田労務課長が帰還責任者となって、八月十四日朝十時、図們駅出発と決定、青年隊員を非常召集してその旨を各家庭へ連絡、その準備に入った。

持ちものは、一人リュック一、手堤二つ、取りあえず、本社の所在地新京をめざすことにした。いざ出発という時に、憲兵隊から「満鉄と国際運輸がいち早く疎開するとは何事か」と文句をつけられる等のいきさつがあつて、予定の時間より遅れ、十四日夕刻八時頃、ようやく疎開列車に乗りこむことができた。翌十五日、敦化駅に着いたが、列車は動かない。敦化支店の社員がきて、今日正午ラジオで重大放送があるとのこと。